

城下町の空間構造再考

——城地・町地の面積比率の問題を中心に——

一 はじめに

本研究は我が国の城下町をとりあげ、主に城地・町地の面積とその藩の石高との相関関係について考察しようとするものである。

いわゆる「地域」についての研究は、地理学がなした最も大きな成果の一つであろう。今日、これを静的ではなくダイナミックにとらえるのは常識であるが、歴史地理学ではしばしば「歴史的地域」という言葉が使われている。W. Christaller は、地域とその中心間には休まない相互作用が働いており、両者に平衡（≡休止）が訪れたときに歴史的な中心地をもつ歴史的地域（Historische Landschaft）が成立する（1）と述べ、水津一朗氏もこの「力学」を自己の地域観の形成に援用している（2）。城下町とその中心である城との間にも、当然、何らかの秩序がみられるに違いない。それはその藩の性格—政治的・経済的な意味での—を反映するものともみられよう。本稿ではかかる仮説を簡潔に、面積（比率）の大小という視点から検討しようとするのである（3）。もっとも、このような考えは筆者がはじめ

金 井 年

表1 城下町の町地・城地面積と石高

城下町(城)名	町面積 (km ²) (A)	絵図作成年代	その時点の 石高(万石)	城の立地 ¹⁾ と年代	城地面積 (km ²) (B)	その時点の 石高(万石)	(A)/(B)=C	藩の ²⁾ 分類
1. 秋田 〔久保田城〕	3.87	弘化4(1847)	20.58	平山(1603~4)		19		
2. 新発田	1.27	正保2・3(1645.6)	5	平(室町→慶長末 ³⁾)	0.244	6	0.197	外
3. 富山	2.37	万治(1658~61)	10	平(1543?→1661)	0.084	10	0.035	外
4. 金沢	8.64	延宝(1673~8)	102.5	平山(1546)	0.088	83.5	0.010	外家
5. 福井	3.70	嘉永6(1853)	32	平(1601→1606)	1.306	67	0.353	外家
6. 盛岡	2.45	文政3(1820)	13	平(桃山→1633)	0.014	10	0.006	外
7. 会津若松	7.11	正保(1644~48)	23	平(1384→1600~)		60		
8. 山形	5.35	幕末	21	平(1357→1592頃)	0.320	24	0.060	
9. 宇都宮	2.65	天保14(1843)	7.78	平(?→1619~22頃)	0.859	?		譜家
10. 川越	1.78	江戸中期	(8.4)	中平(1457→1590以降)				
11. 松本	1.53	元禄8.9(1695.6)	6.5	平(文禄・慶長年間)	0.108	8	0.071	譜
12. 上田	1.44	元和8~宝永3 (1622~1706)	6	平(1583→1626)	0.378	3.8	0.263	譜
13. 岡崎	2.00	明和6(1769)	5	平山 (1452~57→1617)	0.041	5	0.024	譜
14. 岐阜	0.87	幕末	3.2					
15. 大垣	0.83	寛永(1624~44)	10	平(1649頃)	0.116	10	0.140	譜
16. 大和郡山	1.59		6	平(1580~) ⁴⁾	0.308	6	0.193	譜
17. 仙台	12.46	元禄(1688~1784)	4	山(1602→1639)				外
18. 江戸	72.00	享保(1716~36)	(250) ⁵⁾	平(室町→)	4.087	(250)	0.057	譜
19. 小田原	2.75	万延1(1860)	10.7	山+平山 (14C末→1590)				譜

20.	静岡岡 [駿府城]	3.63	?		平(1589→1607)	0.63	5	0.174	
21.	豊橋 [吉田城]	1.65	弘化3(1846)	7					
22.	浜松	1.91	?	(6)	平山(1570→1581)				
23.	桑名	1.17	慶安以降(1650～)	(11)	平(1601～1610→)	0.257	10	0.219	家
24.	名古屋	20.52	元文3(1738)	61.95	平(1610→)	3.250	53.95	0.159	三
25.	高槻	0.61	幕末	3.6	平(10C末→)	0.298	3	0.488	譜
26.	大坂	18.37	元禄(1688～1707)	(65.74) ⁶⁾	平(1583～1629)	0.826	(65.74)	0.045	
27.	尼崎	1.06	幕末	4	平(1617～→)	0.227	5	0.214	譜
28.	岸和田	1.07	幕末	5.3	平(応永頃→1640～)	0.549	5	0.513	譜
29.	和歌山	7.08	安政2(1219)	55.5	平山(1585→1621)	0.207	37.65	0.029	三
30.	姫路	2.95	文化3(1805)	15	平山(1609→)	0.453	52	0.153	譜
31.	岡山	2.54	幕末	27.5	山(1532頃→1600)	0.256	51	0.100	外
32.	明石	1.55	幕末	8	平山(1618～1603～)	0.146	10	0.094	家
33.	津山	2.01	元禄10(1697)	16.85	平山(1441→1603～)				家
34.	福山	1.93	正保(1644～48)	10.1	平山(1622→)	0.372	10	0.193	譜
35.	広島	5.23	寛永(124～44)	42.6	平(1591→1599)	0.682	120.5	0.225	外
36.	高松	2.61	?	(12)	平[水際](1588→1676)	0.561	17.3	0.215	家
37.	徳島	6.22	幕末	25.7	平山(1385→1585)	0.013	17.6	0.002	外
38.	松山	2.32	江戸中期	(14)	平山(1602→1638頃)	0.307	6.5	0.132	家
39.	高知	2.38	寛文7(1667)	17.26	平山(1601→1753)	0.254	20.26	0.107	外
40.	小倉	2.50	?	(14)	平(1602→1606)				譜
41.	福岡	4.41	幕末	51.3	平山(1601→1608)				外

42. 久留米	3.07	?	(12)	平山(天正年間→1621)				外
43. 大分 〔荷揚城〕	1.84	江戸中期	(2)	平(1599→1602)	0.042	2	0.023	諸
44. 熊本	4.77	?	47.5	平山 (応仁年間→1601頃)				外
45. 鹿児島 〔鶴丸城〕	3.93	幕末	72.8	平(1602→)	0.011	61.25	0.003	外

注1) 平＝平城、平山＝平山城、山＝山城をさす。

2) 三＝御三家、家＝家門、譜＝譜代、外＝外様をさす(ただし明治2年時点、未記入は廃藩)

3) →印の左側は最初の城の築造年代(『日本城郭大采』を参考に記入)、右側は改修時の年代を示す。以下同様。

4) 各時代に改修が加えられている。

5) 名称消滅前の石高。 6) 廃藩前の石高。

てではない。既に関山直太郎氏は「(城下町の)大きさは大体藩の大小即ち石高の多寡に比例するのが普通である。従って一旦出来上った城下町でも滅封されたり、或いは転封で小大名が代って来たような場合は、町も人口も縮少する例もある」(4)と述べている。以下ではそれを定量的に検討してみたい。それにより城下町研究(既にいろいろな角度から論じられているが)に新しい知見をつけ加えることができれば幸いである。

二 近世城下町における城地・町地・石高

近世城下町については、全体的にかなりの数の城下絵図が残されている。藤岡謙一郎氏は前二著(5)(6)において各地の城下町をとりあげ、近世の絵図を現行の地形図にオーバーラップさせて、その面積を測定するという試みを行な

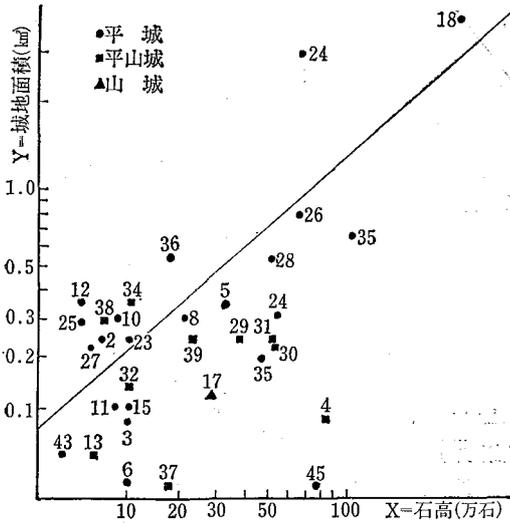


図1 城地と石高との相関

- 1) 番号は表1に準ずる (図2も同様)。
- 2) 相関係数は次の式で求めた (図2も同様)。

$$r = \frac{\sum (X_i - M_x)(Y_i - M_y)}{\sqrt{\sum (X_i - M_x)^2 \sum (Y_i - M_y)^2}}$$

合により中濠の水系の部分をも含む区域としておく。後者は法制的な意味での「町」ではなく、景観的な意味で町屋化された区域をさすのであり、今日いうDIDDに近い。

なお、ここで本稿で用いる「城地」、「町地」の定義を述べておくと、前者は一般に城の大手門より内側で内濠、場

っている。氏の目的はこれと現時点でのDIDD面積との比を求め、明治以降の市域拡張率を明らかにすることであった。本稿では藤岡氏のデータに多くを依りつつも、できるだけ筆者自身でも計測を行ない、データの数を増やすことに務めた(表1)。それにしても全城下町について値を求めることは困難であって、その意味ではまた試論の段階にすぎない。

(一) 城地と石高との相関について

城の多くはルーツを中世戦国期にもつが、いうまでもなく城域ないしその内部の築造物は改変を加えられていく。秀吉時代の大坂城はよく知られた例である。したがって、城地と石高との相関を論ずる場合、城が最終的に確定された時点での石高を比較の対象としなければならない。江戸期に大名の本拠となっていた城は大部分が慶長年間(一五六九〜一六一五)に形を整えられたもので

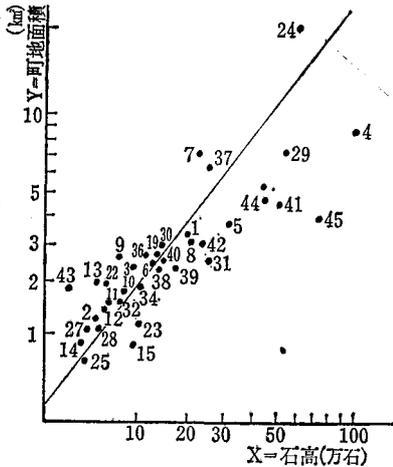


図 2 町地と石高との相関（江戸は除く）

あり、城（城郭）の修築には当然幕府の修築許可が必要であるから、そこには幕府の意図——例えば外様においてはあまり城域の拡大は好ましくないといった——が作用したと考えられる。

図1は石高と城地面積との相関関係を示したものである。これは相関係数 $r=0.73$ であるから、両者の間にはかなりの相関が認められることになる。回帰直線より左上に行くほど石高の割に城地面積が大きく、右下に行くほどその逆の傾向を示している。前者の顕著な例として名古屋・上田・高松などがあり、後者の例としては鹿児島・金沢・徳島などがあげられる。幕府に対する親疎の差がここに現われているともいえよう。外様の中では広島城の面積がとくに大であるが、石高の割にはそれ程ではなく、他の外様の藩では一般に○・三平方キロメートルは越えない。また、通例平城は山城・平山城よりも大きいとされるが、この図ではその差はそれほど歴然とはしていない。しかし山城、平山城には上限があって、面積的に巨大といえるような城がないことは了解される(8%)。

(二) 町面積と石高との相関について

図2は右の表題について図示したものである。 $r=0.66$ で、(一)より一層相関関係は明瞭である。城地の場合には地形的な制約などで対応関係が弱められる面があるのだろう。藩の性格とポイントの分布との関連については大体(一)と同じことがいえるが、金沢などを除いて回帰直線を大きくはずれるものは見当たらない。

(三) 町地・城地の面積比率

水田義一氏は寺内町内部における真宗寺院の役割りを知る手がかりとして、寺院の敷地が町に占める割合をみていく。その結果、例えば富田林では寺院（興正寺）の割合は五〇程にすぎず、八人衆の一人である杉山氏の敷地と同面積で、「町内部における比重がいかに下がっているか」(9)を知りうるとした。城下町についても同様の手法が適用できると思う。図3をみると城地が町地の四分の一を越えるのは譜代か家門に属する藩であって、権力機構の強大さがかがわせる。逆に一%を切るのは外様ばかりである。確かに外様でも広島・新発田は比較的高率であるが、前者は城域確定時の石高と町面積測定時のそれとの大きなギャップが原因の一つといえようし、さらにいうならば、城域が最終的に確定されたのが関ヶ原の合戦前—一二〇万五〇〇〇石の大藩であった—ということが関係していよう。また後者が外様となったのは後のことであり、関ヶ原の役では徳川方について(10)、この高率はむしろ当然である(11)。

この図では岸和田・高槻・福井がとくに比率が高いといえるが、前二者については畿内の城下町規模の零細性(12)に帰される面もある。町は小さくても城は決して小さくないから、必然的に城地面積の比率は高くなる。福井について

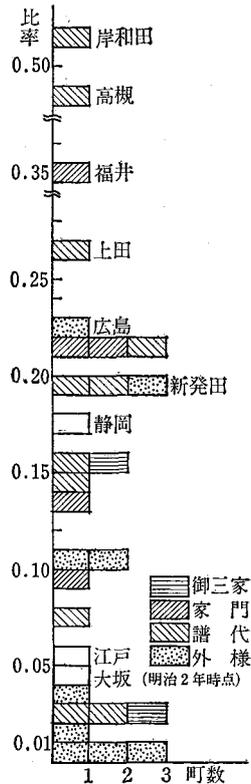


図3 城地面積/町地面積・比率の分布

図3は表1のCをグラフ化したものである。これで見ると、城地が町面積の五〇%を越えるものから一%にたりないものまで、相当の幅がある。この図を作製しようと考えたのは、次の理由による。

は後述したい。

(四) 石高の増減と町地との関連について

先に述べたように、石高と町の面積との間には明らかな相関がみられるが、それは何故かもう少し追求してみた。この点について関山氏は次のように述べている。江戸期の都市は城下町に限らず大体江戸中期までに発展が止まり、そのまま幕末まで続くケースが普通であるが、そのように「城下町に発展性がないことは、その過半或いは大きな部分を占めた武士及びその従属者が固定的であり、従ってそれを支える工商の町人数にも固定的な限度があつたからである」(13)と。これは一応妥当な結論のように思われる。しかしここでは侍階級と町との関係はある程度認めただ上で、あえて両者が「支える」というほど緊密であつたかどうか一般論としては検討の余地がある、という視点を提起したい。すなわち、城あるいはそれに付随する侍屋敷地区と町人が居住する町屋地区との間には、断絶していてもあるのではなからうか。周知のごとく、近世城下町は為政者によって計画的に町立てされたものである。そこには藩規模に相応の大きさをもつた城下町を建設しようとした、形而上学的な意味も含まれていただらう。

最近の史学界の動向として、石高制の高が必ずしも生産高によって一義的に決められるものではなく、政治的に決定されることが多いという考え方がでてきている(14)。この考えをすすめると、石高と町面積との比例関係は形式的意味あいが強いついことにならう。武士を支えるための町屋であるなら、侍屋敷地と町地との間に一定の比例関係が成立することになるであらう。しかし筆者が若干の城下町で計測したところ、例えば大和郡山で、侍屋敷地(含城地)／全町城＝0.733(15)、会津若松で同じく0.253というように、町によってかなりの相違がある。これこそ地域差がその原因になっているといえる。つまり周囲に有力な経済都市がない場合には侍階級のその町の商工業者への依存



図 6 郡山町絵図 (貞享年間)

〔楠本氏蔵、『郡山町史』による〕

しかし逆の場合、つまり町が有力経済都市の勢力圏内に含まれる場合を考えてみなければならぬ。矢守氏は刈谷の領主が名古屋まで赴いて買いものをしていたという面白い事例を紹介されている(18)。これは畿内の城下町が一般に小規模であることの説明にもなる。例えば、高槻なども侍屋敷が町屋よりもはるかに広い敷地を占めているが、そもそも侍階級はその町にそれほど「依存」していないのである。完全に大阪城下町の market area に入っていて、町としての独立性が消滅しているわけである。

石高の増減が明確に反映されてくるのは侍屋敷地の部分である。すなわち、石高は藩のかかえる給人の数を示すバロメーターであり、この点前掲関

度は高くなり、必然的に町屋の占める割合も高くなる。会津若松は外郭内を侍屋敷のみで占める形、矢守氏のいわれる「郭内専土型」を示すが(16)(17)、こうなると侍屋敷地は固定的になり、町の面積もそれにも従って固定的になったとはいえるかもしれない。

山氏の「武士およびその従属者が固定的であり」云々はまさにその通りの場合と、「石高に応じて変動し」の方が正確といえる場合とがある。ここで高槻(図4)と大和郡山(図5・図6)をサンプルにとり、明治初期の地形図によって幕末・明治初期の町の変容をみよう。すると城地十侍屋敷地の部分がそっくり空地・田地になっていることがわかる。一方、町屋の部分は存続している。もちろん町屋地区においても人口減はみられたが、ともかく景観上は町屋地区と城の付属地との間には一線が画されることとなった。

以上述べたことを再度まとめ、かつ補足しておきたい。一口に近世城下町といっても城・侍屋敷と町との結びつきの程度は多様であり、そこにはかなり形式的な論理も働いていた。だから①石高増(減)、②給人増(減)、③町屋地区の拡大(縮小)という三つの現象の相互関連を考えた場合、①↓②↑というシエーマは成り立つが、②↓③の因果関係は場合により稀薄である。つまり①↓②↑③↑④↓⑤↑⑥↓⑦↑⑧↓⑨↑⑩↓⑪↑⑫↓⑬↑⑭↓⑮↑⑯↓⑰↑⑱↓⑲↑⑳↓㉑↑㉒↓㉓↑㉔↓㉕↑㉖↓㉗↑㉘↓㉙↑㉚↓㉛↑㉜↓㉝↑㉞↓㉟↑㊱↓㊲↑㊳↓㊴↑㊵↓㊶↑㊷↓㊸↑㊹↓㊺↑という型が一つ考えられる。また②③が平行的におこりうる場合は①↓②↓③と考えられやすいが、むしろ②↑①↓③↑④↓⑤↑⑥↓⑦↑⑧↓⑨↑⑩↓⑪↑⑫↓⑬↑⑭↓⑮↑⑯↓⑰↑⑱↓⑲↑⑳↓㉑↑㉒↓㉓↑㉔↓㉕↑㉖↓㉗↑㉘↓㉙↑㉚↓㉛↑㉜↓㉝↑㉞↓㉟↑㊱↓㊲↑㊳↓㊴↑㊵↓㊶↑㊷↓㊸↑㊹↓㊺↑㊻↓㊼↑㊽↓㊾↑㊿↓という型が一つ考えられる。また②③が平行的におこりうる場合は①↓②↓③と考えられやすいが、むしろ②↑①↓③↑④↓⑤↑⑥↓⑦↑⑧↓⑨↑⑩↓⑪↑⑫↓⑬↑⑭↓⑮↑⑯↓⑰↑⑱↓⑲↑⑳↓㉑↑㉒↓㉓↑㉔↓㉕↑㉖↓㉗↑㉘↓㉙↑㉚↓㉛↑㉜↓㉝↑㉞↓㉟↑㊱↓㊲↑㊳↓㊴↑㊵↓㊶↑㊷↓㊸↑㊹↓㊺↑㊻↓㊼↑㊽↓㊾↑㊿↓という型が一つ考えられる。これについて前者は福井、後者は大和郡山を例にしてより検討を加えてみたい。なお、提封と城下町規模との相関については矢守氏も論じられており(19)、そこでこの二都市が例としてあげられているので、ここでもそれにならったわけである。

〔福井〕福井についてはかなり豊富な城下絵図が残されており、松原信之氏(20)、矢守氏(21)がその整理・紹介をされている。この地域の大部分は足羽川の埋積による肥沃な沖積平野であり、とくにこの川以南は東大寺荘園糞置荘のあったところで、明治ごろの地形図をみれば明確な条里地割がみられる。城下町はほとんどが川の北部に広がっており、南側では北陸道沿いに町並みが延長しているが、大規模な町屋化は行なわれなかった。福井が石高の割には(しかもその石高は途中で半減されていることを考慮に入れば一層)町が狭小なのは、一つは周辺が古代からの豊かな

表 2 福井城下町の家数と人口

年次	家数	人口
慶長	5131	25231
正徳 2	/	21393
" 3	5459	/
享保 2	5399	20813
" 10	5491	21622
延享 3	5518	/
寛延 3	5386	20533
天明 .5	/	21589
享和 3	5197	/
弘化 3		20269

〔松原信之氏による〕

水田（＝生産地帯）であり、町屋化しにくかったからではないか。ところで福井藩の石高について述べるには、貞享三年（一六八六）のいわゆる「貞享の大法」について触れなければならぬ。福井藩の第五代結城昌親の時代に、昌親とその子綱昌の病弱を理由に幕府が石高を半減させたのであるが、これにより多数の浪人が生みだされ、侍屋敷地区に多くの空白区ができることとなった。福井城下の絵図をみた場合、この年度の前後と後とではどのような変化がおこっているのだろうか。素材に考えれば面積的に大法以前のものの方が大で、以降のものは減少するように思えるが、事実はその

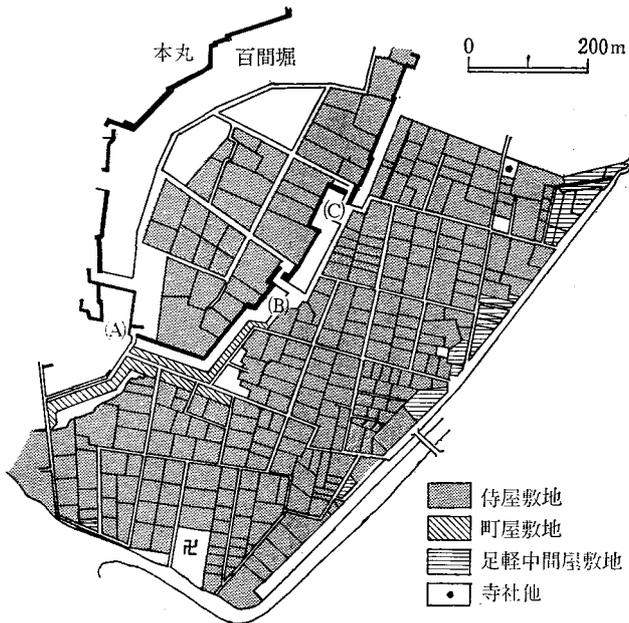


図 7 福井城下町町割図（貞享 2 年=1685）部分

うではなく、貞享二年（一六八五）の図が最大範囲、万治二年（一六五九）大火²²以前の図が最小範囲を示す²³。これはもともと城下が過密状態であって、それが大火をきっかけにむしろ自然な姿に戻ったからと解釈できよう。表をみると慶長年間から正徳二年（一七二二）にかけて人口が減少（その後安定）しているのに家数は増加（これもそ

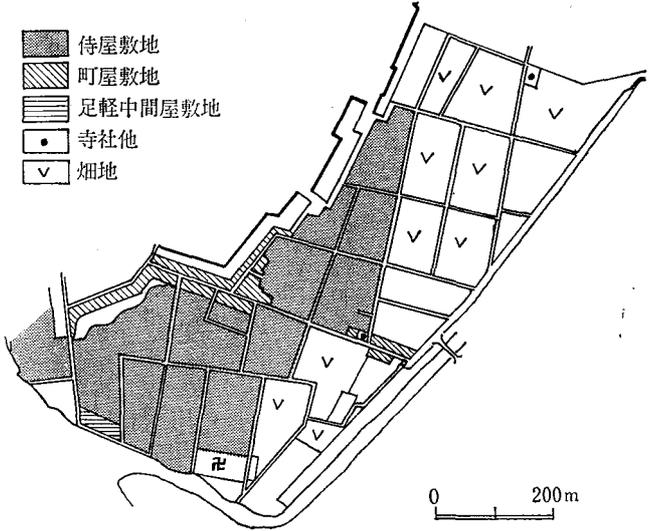


図 8 福井町割図（正徳 3 年 = 1713）部分

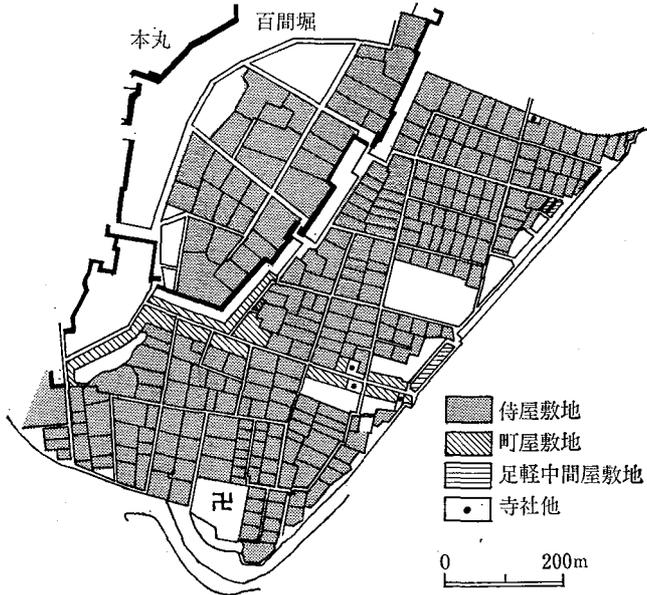


図 9 福井町割図（文化 3 年 = 1806）部分

の後は大体安定)したのは、こういう状況を表わしている。

さて、図7〜9は城の本丸からみて南東方向、春秋門(A)、桜木門(B)、小桜門(C)の三門を挟んでの城内と城外の区域を示している(24)。城内に空地がみられるのは大火以降の現象であり、それ以前は侍屋敷が占めていた。図7から図8にかけて侍屋敷が大幅に減少し、空地・畑地化しているのはすぐにわかる。あまり顕著ではないが町屋敷地は伸びている。これなど城と町の相互無依存を示す例ではないか(25)。しかし全体として空地のまま放置か、農民が利用ということになっている。このような状況はいつまでも続くわけではなく、享保六年(一七一―)松岡藩主松平昌平が福井本藩を継承して松岡から多くの家臣や寺院が福井に移った。松岡引越しは元文年間(一七三六―四一)に完了するが、これにより町内の再構築が行なわれた。結局のところ、石高減↓侍屋敷地区減〔町屋地区への無影響(あるいは町屋の拡大)〕↓空間の再充填というパターンが成り立つ。

松平氏による空間整備について付言したい。図9を図7と比べると、城内の侍屋敷地割には変化がない(他所では何箇所か敷地の合併が行なわれたところがみられる)が、城外(正確には郭内(26)の城外)ではかなり整然とした屋敷割が施行されたことがわかる。そして城内に比べて、屋敷地の小規模なのが顕著になっている。図7では城外でもかなり大きな敷地を持つ侍屋敷もあつたのであるが、ここでは城地の内と外とで明確なランク付けがなされたことが読みとれる。

〔大和郡山〕郡山の築城は筒井順慶にはじまり、豊臣秀長↓秀保↓増田長盛の四代、二〇年を要して一応の完成をみた。すなわち外濠の完成である。もともとの城域はこの内部をさす。城は関ヶ原の役以降廃城となり、その後復興される。これはよくあるパターンであるが、以降の石高と領主の変遷は図10の通りである。水野、松平、本多はいず

187 城下町の空間構造再考

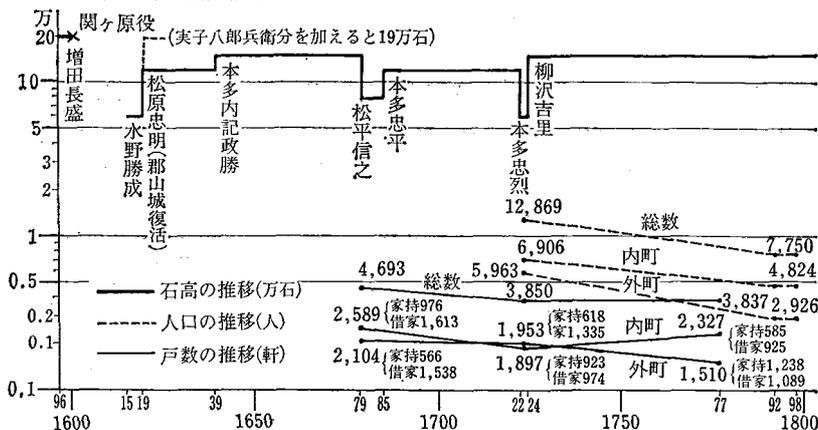


図10 郡山城下町における石高・人口・戸数

〔『郡山町史』、『大和郡山市史』等により作製。人口・戸数は町屋地区のみ〕

表3 享保9年(1724)当時の大和郡山の家数・人数

	内町	外町	計
家数(軒)	1,855	1,801	3,656
人数(人)	7,038	6,220	13,258
平均家族数(人)	3.79	3.45	3.63

〔『町鑑』による〕

れも大坂冬・夏の陣に軍功のあった諸家である。武家屋敷が外堀外にも建設されるようになったのは寛永一九年(一六三九)本多内記政勝が入部してから(27)であり、外堀の内に住んでいた住民が濠外に出され、そこに侍屋敷がつくられるというケースもみられた(28)。かくして、濠の外にも侍屋敷・町屋が形成され、矢守氏のいわれる「内町・外町型」プラン(29)が出現したのである。

少し時代は下るが、享保九年(一七二四)の時点での内町・外町の家屋数、人口を示しておく(表3、ただし町屋のみ)。外町でも郭内に匹敵する位の町屋があったことがわかるし、家族数からみて家屋の規模は内も外も似たものであったと考えられる。

さて野崎清孝氏によると、近世大和郡山城下の図として五種類のものがある(30)。ここではそのうち貞享年間のもの(以下貞享図と呼

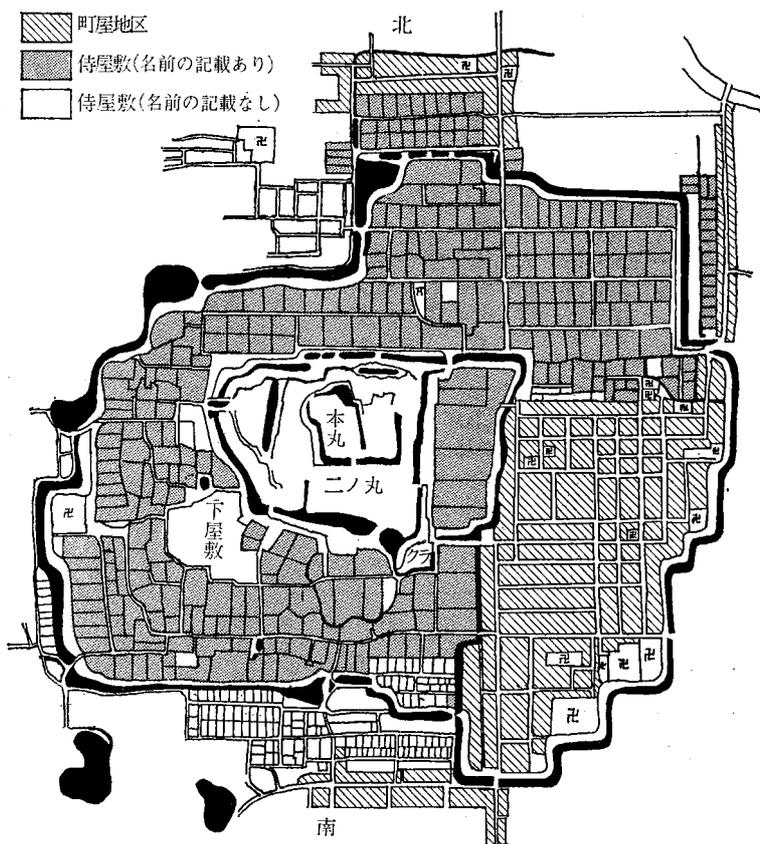


図11 貞享年間の大和郡山
〔図12をベースにして作図〕

称)と安政年間のもの(以下安政図と呼称)をとりあげ、比較考察してみたい(31)(図11・図12)。前述のように、本多内記の時代に城下町は繁栄をみるのだが、その後松平氏の入部に伴い石高が八万石に減封され、さらに大火のせいもあって町は非常にさびれたといわれる(32)。次の本多忠平の入部に伴う知行高の増加で城下はやや活況をとり戻すのである。貞享図はこのころに作製されたものである。図のうち侍屋敷については、名前の記載の有無で

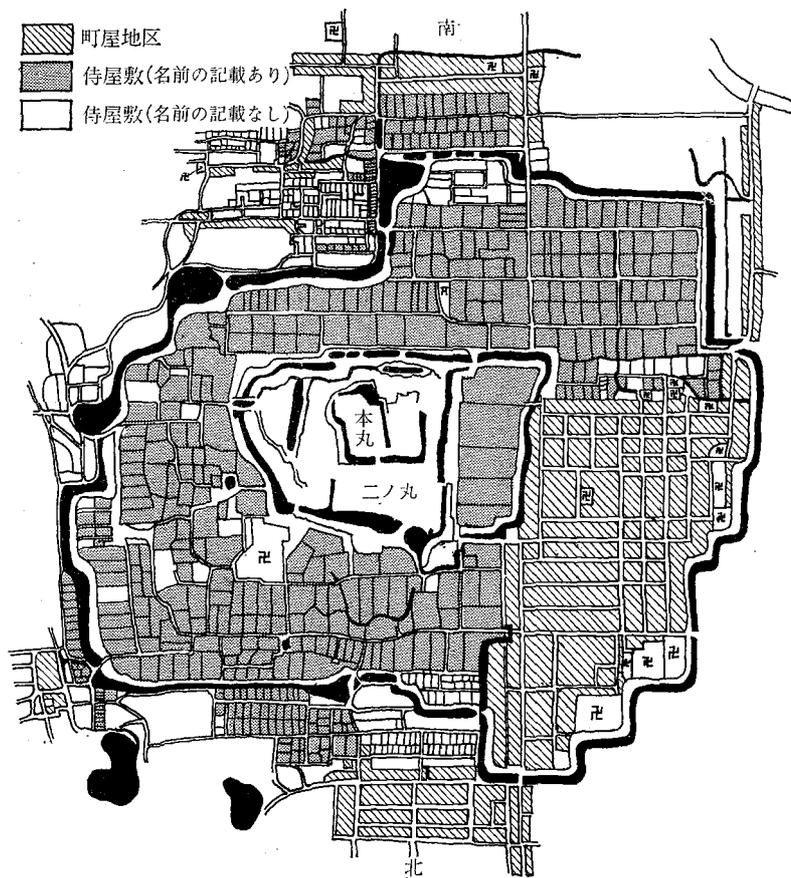


図12 安政年間の大和郡山

屋敷地の充填度を知りうる。南方の小規模な諸屋敷については記入がないが、これは名前を書き入れるにはスペースが小さすぎたとも考えられ、空地になっていたとは断定できない。郭内の屋敷地にはほとんど空白がないため、町がたち直った後か、あるいは滅封以前の情況を示しているともみられる。なお、安政図には小さな武家屋敷にまで名前の記載が及んでおり、したがって空白のところは大体空地と考えてよいと思う。以上の前提を踏まえた上でこの二枚の絵図を比較すると、次の諸点を指摘できる。

- (1) 貞享図に比べて安政図は明らかに外部への拡大がみられるが、とくに周辺の侍屋敷に空地が目立っている。
- (2) 時代的に郭内(外)の侍屋敷Ⅱ大(Ⅱ小)という図式が明瞭になっている。これは福井についてもいえたが、ここでも同様である。

他にも寺院の移動などとりあげるべき点はあるが、ここではこの二点をあげておく。(1)からさらに論をすすめた
いが、これは次のように解釈できるだろう。すなわち本多忠平氏入封以降、石高一二万石の時代に町は相当の拡大を
みたのである。ところが第二の衰退期がやってくる。享保七年(一七二二)本多忠烈が藩主となり、この際に石高は
半減されることとなった。藩では翌年、家中の約半数に暇を出したとされる⁽³³⁾。本多氏のあと享保九年(一七二四)
に柳沢吉保が甲府から入部したが、もはや町は往時の繁栄をとり戻さなかつたようである。この点をもう少し確認し
ておこう。

町屋の部分については絵図には単に町屋とわかる程度の書き方しかされず、内部の充填の程度は確かめようがな
い。そこで人口・戸数の面から補足する必要がある。町の人口については延宝七年(一六七九)、享保八年(一七二
三)、安永六年(一七七七)の三時点でのデータがあり⁽³⁴⁾、図はそれに基づいて作製した。柳沢入封以降石高は一五万
石で安定するにもかかわらず、人口は内町・外町ともに減少し総体的にみて幕末にかけて相当の人口減となってい
る。

一方町屋敷数については享保八年(一七二三)、寛政四年(一七九二)、寛政一〇年(一七九八)のデータがあり⁽³⁵⁾、
これもグラフ化してみた。注目すべきは享保ごろからの変化で、内町は家数の増加、外町は減少がみられることであ
る。これはおそらく外町の住民が内町に流入していったのであろう。それは「家持」として流入であり、だから途中

から内町における家持・借家の比率が逆転していくのである。ここで侍屋敷ばかりでなく町屋についても、衰退は外側から進行する、という図式が成立する。

なお、町家数は差し引き横ばい状態となるのであるが、人口は先述のように、大幅に減少している。これはやはり町の衰退ととらえざるをえない。福井といい大和郡山といい、単に物理的な面積の変化のみを論じていても不十分であって、人口変動をも考慮しなければならぬことがわかる。

以上から大和郡山においては、中途までは石高と町の盛衰は連動しているが、享保ごろからはそれが崩れ、石高減↓(a)町屋地区の減少(↓求心化)・(b)侍屋敷地の減少↓再充填ならず、という図式ができあがる。しかし、(a)と(b)の相関性—これがどの程度のものが論点となるのであるが—についてはなお説明が不十分である。

三 おわりに

藩の石高と城地・町地の相関について明らかにした上で、ここまでその意味づけを探ってきた。近世城下町ではかなり形式的な論理が優先する。その点、W. Christaller 流の地域のとらえ方にはややあてはまらない面もある。表1で用いた絵図は時期的にかなりの幅があるが、もしこれを幕末で統一したならば、相関性はもっと低くなるのではないかと考えている。なぜなら大和郡山でみたように、石高の変化が町の拡がりを規制しないようなケースがでてくるからである。封建制の崩壊は一つはこういう面からもとらえられるのではなかろうか。

事例が福井と大和郡山に傾斜しすぎたため、法則的なことを断言できるところまではいかなかった。同様の手法を用いて他の城下町についても調べてみる必要があるとあり、そうすれば今とはまた異なった結論がでてくるかもしれ

ない。これが今後の課題である。

注

- (1) W. Christaller, *Das Grundgerüst der räumlichen Ordnung in Europa, Frankfurter Geogr. Hefte, 24, 1950*
- (2) 水津一朗「共同体の地理的規模」史林三八一六、一九五五
- (3) もちろん単に面積だけでなく、人口などの要素も考察する必要がある。これはのちに大和郡山のところで述べる。
- (4) 関山直太郎『近世日本の人口構造—徳川時代の人口調査と人口状態に関する研究—』吉川弘文館、一九五八、二二二頁。
- (5) 藤岡謙二郎『現代都市の歴史地理学的分析』古今書院、一九七七、六九〇七七頁。
- (6) 藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』柳原書店、一九八三、一一〇二八頁
- (7) これは矢守氏のいわれる「城内」と同じ意味である(矢守一彦『都市プランの研究』大明堂、一九七〇、二五〇～二五一頁)。
- (8) なお、城は城下町における最大のランドマークということもできる。城(天守閣)の高さと町面積は比例関係を示すのではないかと筆者は考えているが、データ不足のため、今のところ確実なことはいえない。ランドマーク(Landmark)の概念については次の文献を参照。Kevin Lynch, *The Image of the City, 1960* (丹下健三・富田玲子訳『都市のイメージ』岩波書店、一九六九、九八～一〇四頁)
- (9) 水田義一「寺内町の形態再考」歴史地理学会会報九六、一九七八、二四～二五頁。
- (10) 慶長三年上杉景勝が会津へ移封されたあと、堀秀治が春日山城主として越後へ赴任するにともない、堀の与力大名溝口秀勝が新発田に封ぜられ藩祖となった。秀勝は入封直後上杉遺民一揆の鎮圧に功をたて、関ヶ原の役では徳川方についたことが藩の基礎を安定させる条件となった(中村辛一「新発田藩」児玉幸多編『近世史ハンドブック』近藤出版社、一九七二、七五頁)。
- (11) 外様が親藩・譜代に転化する例はしばしばみられる(後述の大和郡山など)が、このような逆のケースもある。
- (12) その理由について矢守氏は次の三点から検討されている。(A)藩の構造、(B)城下町四周における非城下都市の発達度、(C)提

- 封の分散度(矢守一彦「畿内における城下町の規模と藩領の規模について」、『幕藩社会の地域構造』大明堂、一九七〇)
- (13) 前掲(4) 二三五頁。
- (14) 松下志朗『幕藩制社会と石高制』塙書房、一九八四、一五頁。
- (15) ただし郭内のみで計測。
- (16) 矢守一彦『城下町』学生社、一九七二、第四・五章。
- (17) 矢守一彦『都市図の歴史―日本篇』講談社、一九七四、第二部第二章・第三部第二章(2)。
- (18) 矢守一彦『城下町研究ノート』古今書院、一九七二、一〇七頁。
- (19) 前掲(12)
- (20) 松原信之『若越城下町古図集』古今書院、一九五七
- (21) 矢守一彦「福井城下絵図史について」(『歴史地理研究と都市研究』上巻)大明堂、一九七八
- (22) 福井の大火については、『福井県史・第二巻』、一九二一、四八四～四九一頁を参照。
- (23) 松原信之氏の御教示による。
- (24) 図はすべて前掲(20)からトレースした。
- (25) 旧武土地に町屋が大量に流入すれば逆相関がなりたつといえようが、そうとはいえない。もちろん外側の町屋がより内側に移動するという例はみられるだろう。
- (26) 「郭内」の定義についても矢守氏に従い、外濠内、三の丸・中曲輪等の名称でよばれる区域としておく。福井では郭内V城地であるが、両者がイコールになる場合もある。前掲(7) 二五〇～二五一頁参照。
- (27) 『大和郡山市史』、一九六六、七九六頁。
- (28) 前掲(27) 二二三頁。
- (29) 前掲(16)、(17)
- (30) 野崎清孝「大和郡山城下町絵図・解説書」(矢守一彦編『日本城下町絵図集・近畿篇』昭和礼文社、一九八二
- (31) 前掲(30)には時期的にこの二枚の絵図の間にあたる宝永四年(一七〇七)の絵図の写真版も載せられており、そこでは侍

屋敷の外部への相当な拡大が読みとれる。

(32) 前掲(27) 二三六―二三七頁。

(33) 前掲(27) 二四二頁。

(34) 『郡山町史』、一九五三、二九七頁。

(35) 前掲(34)

付記

本稿は昭和五九年度歴史地理学会大会(四月二一日、於砺波市文化会館)で発表した内容を骨子とし、さらに発展させたものである。発表の際に御意見下さった矢守一彦先生、中島義一先生、その他の方々に御礼申し上げます。矢守先生には成稿の途中においても助言をいただいた。また面積測定に際しては奈良女子大学研究生の寺本陽子さん、大阪市立大学学生の中野隆雄氏の御協力をえた。記して謝意を表するものです。